

自ら学ぶ児童が育つ算数学習

～「手掛かりカード」を基にした単元内自由進度学習を通して～

名古屋市立千鳥小学校 石川 尋康

1 研究のねらい

(1) 目指す児童の姿

私は、自ら学ぶ児童を育てていきたい。自ら学ぶ児童とは、自分の現段階を正しく把握し、課題を見付け、自分なりの方法で解決することができ、そして、達成状況の振り返りを基に、さらに自分の課題を見付けたり、物事を発展的に考えたりする児童である。

「自ら学ぶ力」について、藤永(2013)は、「学習過程のすべてに学習者自身が能動的にかかわり、自己の認知活動や行動をコントロールしながら、効果的に学習目標を達成していく力」と述べている。また、丸岡(2022)は、「学習のゴールとして、一人一人の子どもがそれぞれに学びを完成させられるよう、教師は学びを少しずつ手放していかなければならない」と述べている。藤永・丸岡の提言を受けて、本研究では、単元内自由進度学習を取り入れて学習を進めていく。そして、徐々に教師から児童に学びの主体を移行していきたいと考える。

(2) これまでの指導の反省

私が、担当する学級の児童は、新たな問題に出会ったときに、すぐに解決を諦めてしまう児童や、教師や他の児童が解決方法を提示したり、伝えたりするまで解こうとしない児童が多い。これは、今までの一斉授業で、問題は与えられるもの、解き方は、誰かが教えてくれると考えていることが原因と考える。そこで、昨年度児童へ問題の与え方を工夫し、数値を隠して問題を想像させたり、自力解決と学び合いの時間を明確に分け、自力解決を促したりしてきた。しかし、これでは、問題を与えている状況は変わらなかった。

2 研究の内容

(1) 研究の手立て

本研究では、単元内自由進度学習の中で、以下の二つ手立てを講じることで目指す児童に迫りたいと考える。

【学びを構築する工夫】

単元の導入の場面で、診断的テストを実施し、自分の現段階を把握させる。次に、単元の教科書内容を教師と一緒に読み込み、本単元の学習内容をつかませることで、課題を見付けたり、学習計画を立てたりすることができるようにする。

単元計画を立てる第1時では、学習する単元で使えそうな既習事項を想起、共有する時間を作る。その際、教師が提示した、「クリアすべき問題」に対して、「もし、どんな数(問題)だったら、今までの勉強で解けるかな」と発問し、既習問題にして考えさせ、既習の問題を解くときに使った考え方を、みんなで「手掛かりカード」にまとめ、共有することで、数学的な見方・考え方を働かせて考えることができるようにする。

【学びの推進力を付ける工夫】

自由進度学習の時間において、課題解決に向けた学習をした後、毎時間A Iドリルで形成的テストを行い、課題を解決することができたかどうかを振り返らせる。また、個に応じて「この先の数の仕組みはどうなっているのかな」や「もし、〇〇があったとしたら、今までの学習で解けるかな」と声を掛けていく。単元の最後に学んだことを「発見カード」にまとめさせることで、数学的な見方・考え方を働かせて考えることができるようにする。

(2) 検証方法

【学びを構築する工夫】

自身の学習の段階を正しく把握し、課題を見付けることができたか、児童が作成した単元学習計画表からつかむ。さらに、単元を通して、数学的な考え方を働かせて考えることができたか、学習の振り返りやノートの記述からつかむ。

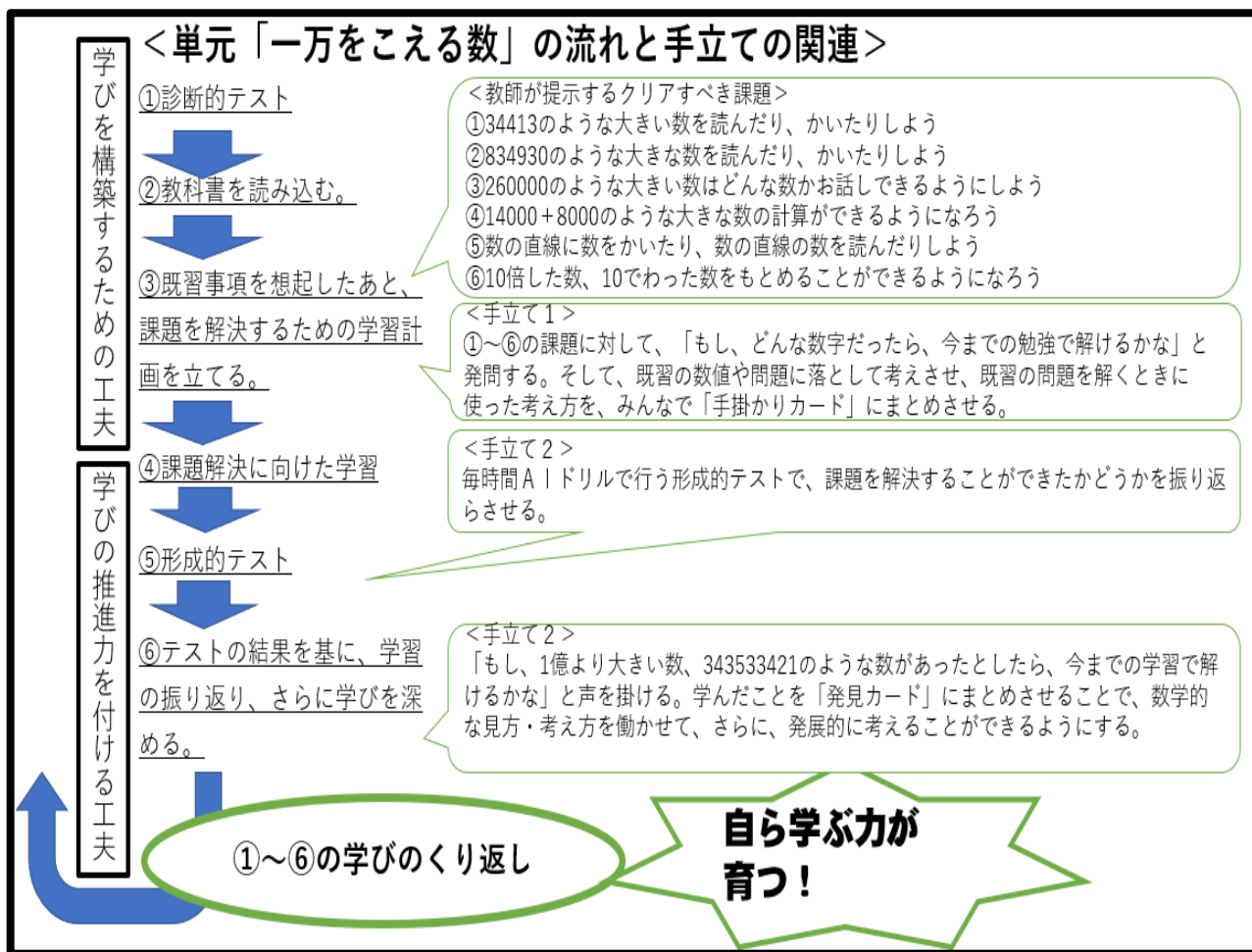
【学びの推進力を付ける工夫】

毎時間の振り返りの際に、教師から個別に数学的な見方・考え方を意識させるような発問をすることで、数学的な見方・考え方を働かせて考えることができたか、ノートの記述や学習の振り返りからつかむ。

(3) 実践予定単元

○単元名及び時期 「一万をこえる数」 6月中旬 <12時間完了>

○手立ての具体化



○ 単元末に見せる児童の姿<具体的な様子>

手掛かりカード「一、十、百、千が大切だ」「10個集まると、大きい位が出てくる」「100円玉で考えると計算できる」を使ったら、大きな数の問題も解くことができました。大切なことは、「10個集まると、大きな位が出てくる」「数の束で考える」です。もっと大きな数があっても、きっと、10個集まれば、次の位が出てくると思います。大きな数の計算も、もっと大きい束や数のまとまりで考えればできると思います。発見したことが使えるか試してみたいです。

<参考文献>

藤永保 (2013) 『最新 心理学事典』 平凡社

丸岡慎弥 (2022) 『夢中を仕掛ける「教えない」授業』 学陽書房